



**日本組織培養学会  
会員通信**

**第 113 号**

**平成 15 年 6 月 27 日**

発行者

\*大野 忠夫 (セルメデシン株式会社)

林堂 安貴 (広島大学歯学部  
口腔外科学第 1 講座)

\*責任者連絡先

〒305-0074

つくば市高野台 2-1

筑波ラボナノテクパーク・

早稲田大学超精密化学

プロセス研究センター 山崎研究室 内

Tel & Fax: 029-839-9873

**目次**

- 1 . 会長あいさつ . . . . . 2
- 2 . 幹事会議事録 . . . . . 3 ~ 4
- 3 . 日本組織培養学会 76 回大会報告 . . . . . 5
- 4 . 第 7 6 回日本組織培養学会総会議事録 . . . . . 6
- 5 . 会計報告 . . . . . 7 ~ 9
- 6 . 平成 15 年度奨励賞の審査報告 . . . . . 10
- 7 . 奨励賞受賞者あいさつ . . . . . 10 ~ 12
- 8 . 評議員制度 . . . . . 12 ~ 13
- 9 . 情報技術利用委員会報告 . . . . . 13 ~ 15
- 10 . 研究教育システム委員会報告 . . . . . 15 ~ 16
- 11 . 「培養技術相談室」の開設 . . . . . 16
- 12 . 細胞バンク委員会報告 . . . . . 17 ~ 18
- 13 . 名誉会員推載を受けて (高木良三郎先生) . . . . . 18 ~ 20
- 14 . 編集委員会報告 . . . . . 20

## 1. 会長報告

日本組織培養学会会長 許 南浩

最近の学会活動についてご報告申し上げます。

本学会のあるべき姿については、ここ数年来議論を重ね、検討を続けて参りました。その結果、学会を一挙に活性化する魔法の杖はなく、「原点に帰る」ことを基本に、真面目に地道に努力を重ねることが、小さくてもきらりと光る学会への道であるとの結論に達しました。Scientific な側面でも学会運営でも原点回帰を基本原則として、改革を進めて参ります。

詳細は別の機会に譲りますが、scientific には、1) in vivo との比較の下に、培養細胞・培養条件を精密に評価し活用する、2) 個々の培養系の特徴をよく見極め、必要な細胞、培養法が無ければ自ら開発する、の2点が重要ではないかと考えております。

学会は情報交換・相互交流を通じて研究活動を向上させると共に、必要な社会活動を行うのが本来の姿であると考えます。本学会の創設以来、組織培養は大いに広まり、今や日常的・普遍的な技術となりました。しかし、技術が広まった分だけ、技術を知る人と知らない人の境界領域もかえって広くなり、基本的な問題に悩む研究者あるいはその卵が多数存在いたします。本学会はこれまでも研究教育システム委員会を中心に、このような問題を少しでも解決すべく努力を重ねて参りましたが、この度、私達に課された社会的使命を果たし、同時に本学会を再び発展の軌道に乗せる契機とすることを目指して、広く一般に開かれた「培養技術相談室」をホームページ上に開設します。

運営体制上の大きな改革は、「評議員制度」の導入であります。この件は、ストラテジック委員会で発案されて以来、幹事会で議論を重ね、会員通信でも報告してご意見を伺って参りました。その結果、学会活動を担う中核として評議員制度を導入すること、当面は会長、幹事会、各種委員会よりなる執行部の基本構造は崩さず、評議員会は諮問機関として位置づけること、今後の議論によっては評議員を基盤にする学会運営体制への更なる変更も排除しないことに決しました。その方向で、会則、細則の改正を5月23日総会に提案し、原案どおりご承認頂きました。詳細は、別項をご覧ください。なお、総会席上で、評議員候補を評議員が提案し、幹事会で決定するのでは、一般会員の意向が反映されないお手盛りになるのではないかと疑義が出されました。しかし、評議員会が執行部の選出母体となる多くの学会と異なり、本学会では一般会員の直接選挙による幹事が総括的な権限を持って学会を運営し、評議員会は諮問機関的機能を果たすものであるからその懸念はないと思われる点をご説明し、ご承認頂きました。なお、評議員は上記の「培養技術相談室」の回答者としての役割を担って頂き、単なる名誉職ではなく「働く評議員」を目指します。

本学会は徐々にですが、大きな変革を遂げようとしています。それは一言で言えば、「原点回帰」という理念をIT技術の上に花咲かせようというものです。「培養技術相談室」をホームページ上に開設し、試験運用しています。会員通信、機関誌 TCRC は全てホームページ上で閲覧できるようになります。今年度から大会抄録の受付もオンライン化されました。入会申込みもオンラインで可能です。さらに、細胞バンクと提携しながら、培養に関する多様な情報を提供していきます。これら全ては、昨年9月に発足した情報技術利用委員会のご努力の賜物です。改めて委員の皆様へ感謝いたします。

会員の皆様、1週に一度はホームページをご覧ください。

## 2. 平成 15 年度第 1 回幹事会議事録

場所：昭和大学附属病院第 1 会議室

日時：平成 15 年 5 月 21 日（水）17:00～20:00

### 出席者

会長：許 南浩（岡山大）

幹事：佐藤 靖史（東北大） 永森 静志（杏林大）  
菅 幹雄（ゼリア） 鎌田 伸之（徳島大）

### 委員会委員長等：

増井 徹（国立技研） 岡本 哲治（広島大）  
鈴木 崇彦（東大） 間中 研一（独協大）  
星 宏良（ペプチド研） 古江 美保（神奈川歯科大）  
野瀬 清（昭和大）

### 次期大会世話人：

丸野内 棣（藤田保健衛生大）

1. 庶務報告（菅：mikio-kan@zeria.co.jp）
  - 1) 会員状況報告：2003 年 3 月 31 日現在の会員数は，国内正会員 540 名，賛助会員 33 件，名誉会員 6 名，海外正会員 23 名．過去 1 年間の入退会状況は，入会 16 名，退会 42 名であることが報告された．
  - 2) 柏木麻里子庶務幹事（昭和大）がアメリカ留学のため，鎌田伸之幹事（徳島大）が会員通信担当から庶務幹事に変更になった．
  - 3) 山根 績 東北大学名誉教授が本年 3 月 17 日ご逝去されたとの報告があり，総会で黙祷を行うことが提案され了承された．
2. 会計報告（永森：nagamori@kyorin-u.ac.jp）

平成 14 年度の会計報告と平成 15 年度の会計案が提出され承認された．
3. 会員通信報告（鎌田（代理））

会員通信担当は，新たに大野忠夫幹事（セルメディシン）と，引き続き林堂安貴幹事（広島大）が行う説明があった．
4. 奨励賞報告（佐藤：y-sato@idac.tohoku.ac.jp）

2003 年 6 月発刊の「最新科学賞辞典 1997-2002」((株)日外アソシエーツ)に日本組織培養学会の過去の奨励賞が掲載される旨報告があり了承された．
5. 高木良三郎先生の名誉会員推挙について（許：namu@md.okayama-u.ac.jp）

本学会に多大な貢献をされた高木良三郎 前大分医科大学学長を本学会名誉会員に推挙する提案があり承認された．
6. 科研費審査委員の推薦について（許）

学術振興会から本学会に依頼された科研費審査委員について，幹事，各種委員会委員長からの推薦を集約した結果，一次審査委員として古江美保，鎌田伸之，永森静志の 3 名，二次審査委員 1 名として許 南浩の候補者を推薦した旨報告があり承認された．

- 7 . 2004 年の SIVB 対応について (古江 : mihofuru@kdcnet.ac.jp)  
2002 年 5 月に古江, 増井委員が SIVB に参加し, 本学会の協力依頼を受けていたが, これまで, 先方からアクションがないので増井委員が 5 月の SIVB 大会に参加して状況の確認を行なう, との報告があった .
- 8 . 評議員制度の導入とそれに伴う会則, 細則改訂について (許)  
評議員制度導入に関する報告と討論があり承認された .  
それに伴う会則, 細則の改訂案が提出され承認された . また, 会則, 細則の改正案は前もって会場に掲示の上総会に諮ることが承認された .
- 9 . 培養技術相談室の運営基本方針について (許)  
相談室をホームページ上で運用することが提案され承認された .
- 10 . 情報技術委員会報告 (間中 : manaka@dokkyomed.ac.jp)  
培養技術相談室, オンライン入会, 登録システム, メーリングリストなどの活動状況の報告があった .
- 11 . 編集委員会, T C R 事務局報告 (星 : hoshih@func-p.co.jp)  
In Vitro Cell. Dev. Biol. から学会誌の共同発行の提案についての報告があり, その方向で検討を続けることが承認された .
- 12 . 教育システム委員会報告 (鈴木 : tsuzuki@m.u-tokyo.ac.jp) 本大会にて旭テクノグラスによる E S 細胞のテクニカルセミナーを行うが, 反応が良ければこのようなセミナーをさらに継続したいと提案があり承認された .
- 13 . 倫理問題検討委員会報告 (増井 : masui@nihs.go.jp)  
厚生労働省の臨床研究ガイドラインに対する意見書を提出したことが報告され承認された .
- 14 . 第 7 6 回大会世話人報告 (野瀬 : knose@pharm.showa-u.ac.jp)  
本学会の準備状況に対する説明があった .
- 15 . 次期大会 (第 7 7 回) について  
次期大会世話人の丸野内先生 (藤田保健衛生大) より, 平成 16 年 5 月 27 日, 28 日に愛知産業貿易会館において開催予定である旨説明があった .
- 16 . その他  
これまでディスパーゼを通じて組織培養研究と本学会に対し多大な貢献をされた, 合同酒精株式会社酵素医薬品事業部の吉川正明様が本年 1 月に定年退職され, この機に総会において感謝状を贈呈することが提案され, 承認された .  
新たに会長選出の会計幹事として, 宮崎正博先生 (岡山大学) を選出したい旨提案があり, 了承された .

(文責 : 鎌田伸之, 菅 幹雄)

### 3 . 日本組織培養学会 第76回大会を終えて

昭和大学 薬学部 野瀬 清

去る5月22, 23日の日程で昭和大学上條講堂において, 第76回大会を開催させていただきました。当日は天候にも恵まれ, 参加者総数は事前登録36名, 当日受付113名の149名の参加を頂きました。培養学会大会としては多い方ではなかったかと, ご参加の皆様にご礼申し上げます。

今回の大会では, シンポジウム1として「培養細胞の可塑性」をテーマと致しました。日常的に培養細胞として用いている細胞が, 多様な機能を保持していたり, 発現したりする可能性を持っていることが最近数多く報告されています。幹細胞ではなく, 体細胞にもそのような興味ある特性を持っていることを, 遺伝子解析だけでなく多面的な解析を行うことは組織培養研究にとって重要な課題だと考えています。今回のシンポジウムでは6名の演者のうち会員以外から5名の先生をお願いし, やや例年とは異なった雰囲気のお話が伺えたのではないかと思います。羊膜細胞, 骨髄間質細胞, 骨格筋, 平滑筋細胞などを用いて, 細胞機能の可塑性の具体例をお示し頂き, その基礎となる分子として細胞外基質蛋白質やシグナル分子の解析は興味深い問題を多く孕んでいたと考えられます。

シンポジウム2では, 西 義介先生のアレンジにより「培養細胞をめぐる特許戦略とバイオ産業」を内容とする6名の先生方のお話を伺いました。最近, バイオビジネスが盛んになってきており, 培養細胞を扱う者が単なる研究面だけに頭を使うのではなく, ビジネスの分野にも関心を持って頂きたいとの趣旨で行いました。こちらもそれぞれの分野で活躍されている会員外の4名の先生をお招きしました。最終日の午後ということもあって, このセッションではやや空席が目立ちましたが 熱のこもったご講演はそれぞれ示唆に富むものだったと思われま。実際にベンチャー企業を立ち上げて頑張っておられる会員の先生のお話では, 培養細胞の有用性を具体的に示して頂きました。

一般講演は25題, 奨励賞候補演題が3題集まりました。本来の学会活動としては一般講演を重視すべきと考えていますが, 現実には残念ながら締切り期日を延長してやっと体裁が整ったというのが現状です。ご協力賜りました諸先生方に厚く御礼申し上げます。培養細胞が今日ライフサイエンスの分野で普く用いられていることは周知の事実で, 本学会の存在価値が薄められてきていることは事実だと思えます。培養細胞を用いて, それぞれの興味のある分野で活躍することは重要なことではありますが, 培養細胞の有用性と限界を常に意識しながら, 培養の原点を考える本学会の今後の発展を祈念しております。

## 4. 第76回日本組織培養学会総会議事録

場所：昭和大学上條講堂

日時：平成15年5月23日（金）11：24～12：30

総会に先立ち、本年3月17日に逝去された山根 績名誉会員（東北大学名誉教授）に対し、黙禱が行われた。

恒例により、大会長の野瀬 清 昭和大学教授が議長に選出された。

### 報告および協議事項

1. 許 南浩会長あいさつ
2. 庶務報告 菅庶務幹事
3. 会計報告 永森会計幹事より  
平成14年度の会計報告と平成15年度の会計案が提出され承認された。
4. 評議員制度の導入について  
許 会長より評議員制度導入に関する報告があり承認された。  
それに伴う会則、細則の改訂案が前もって会場に掲示され承認された。
5. 委員会報告  
情報技術利用委員会報告  
間中委員長より培養学会のホームページについて、培養技術相談室、オンライン入会、登録システムなどの報告があった。  
編集委員会報告  
星委員長より組織培養研究の状況についての報告があった。
6. 名誉会員選出について  
許会長より、高木良三郎 前大分医科大学学長を本学会名誉会員に推挙する提案があり承認され、感謝状、記念品が贈られた。その後、高木先生よりご挨拶があった。
7. 感謝状送呈について  
ディスプレイを通じて本学会に対し多大な貢献をされた合同酒精株式会社の吉川正明様に感謝状が贈呈された。
8. 奨励賞贈呈  
佐藤幹事より奨励賞の発表が行われ、受賞者に記念品が贈られた。
9. 次期大会世話人あいさつ  
丸野内 棣先生（藤田保健衛生大）より、次期大会を平成16年5月27日と28日に愛知産業貿易会館において開催予定である旨説明があった。
10. 第76回大会世話人あいさつ  
野瀬 清先生（昭和大学）より本学会参加者に感謝するとの挨拶があった。

（文責 鎌田伸之、菅 幹雄）

## 5 . 会計報告

### 日本組織培養学会 平成14年度収支決算書 (平成14年4月1日～平成15年3月31日)

#### 一般会計

収入の部		(単位：円)	
勘定科目	平成14年度予算額	平成14年度決算額	摘要
正会員会費	2,500,000	2,172,650	00,01年度分含む、端数入金あり
賛助会員会費	1,200,000	1,170,000	39口分
入会金	20,000	16,000	16名分
広告収入	900,000	505,250	広告・別刷収入
雑収入	260,000	656,040	培養代替法合同大会(40万円)
小計	4,880,000	4,519,940	
前年度繰越金	3,077,722	3,077,722	
合計	7,957,722	7,597,662	

支出の部		(単位：円)	
勘定科目	平成14年度予算額	平成14年度決算額	摘要
研究誌発行費	1,700,000	1,274,295	Vol.21 No.1、2・3合併、4
会員通信発行費	150,000	137,235	111号、112号
大会補助金	600,000	600,000	第76回大会事務局へ
秋期シンポジウム補助金	0	400,000	
業務委託費	1,150,000	1,031,892	学会事務センターへ
研究誌発送費	470,000	241,220	Vol.21 No.1、2・3合併、4
事務通信費	120,000	83,647	会費請求書発送費 他
名簿作成積立金	150,000	150,000	
幹事会議費	50,000	0	
編集会議費	50,000	18,800	編集委員会事務費
雑費	40,000	11,735	コピー代、各種リスト出力経費
予備費	30,000	0	
小計	4,510,000	3,948,824	
次年度繰越金	3,447,722	3,648,838	
合計	7,957,722	7,597,662	

#### 特別会計

収入の部		(単位：円)	
勘定科目	平成14年度予算額	平成14年度決算額	摘要
寄付金収入	180,000	234,970	合同清酒「ディスパーゼ」に対する報酬
出版収益	50,000	0	
利子収入	5,000	191	MMF利息
雑収入	5,000	1,260	JICST許諾抄録使用料
小計	240,000	236,421	
前年度繰越金	7,888,314	7,888,314	
合計	8,128,314	8,124,735	

支出の部		(単位：円)	
勘定科目	平成14年度予算額	平成14年度決算額	摘要
外国人招待費	200,000	0	
学会奨励賞	300,000	300,000	第74回奨励賞副賞
細胞バンク委員会	50,000	0	
倫理問題検討委員会	200,000	400,000	
教育システム委員会	100,000	100,000	
Strategic委員会	100,000	0	
雑費	50,000	33,243	残高証明書発行手数料 他
小計	1,000,000	833,243	
次年度繰越金	7,128,314	7,291,492	
合計	8,128,314	8,124,735	

1. 一般会計の部

貸借対照表

平成15年3月31日現在

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
現金	4,225,840	未払費用	600,000
預け金	701,793	前受会費	679,000
有価証券	450,205	会員名簿積立金	450,000
		前年度繰越金	3,077,722
		当期収支差額	571,116
		次期繰越金	3,648,838
合計	5,377,838	合計	5,377,838

財産目録

資産の部 平成15年3月31日現在

科目	摘要	金額
現金	編集手許金、編集委員会手許金	4,225,840
預け金	(財)日本学会事務センター	701,793
有価証券	みずほインベスターズ証券 MMF	450,205
合計		5,377,838

負債の部

科目	摘要	金額
未払費用	第76回大会補助金	600,000
前受会費	平成15年度以降入会金、会費	679,000
合計		1,279,000

1. 特別会計の部

貸借対照表

平成15年3月31日現在

借方		貸方	
科目	金額	科目	金額
預け金	1,060,160		
普通預金	6,231,332	前期繰越金	7,888,314
		当期収支差額	596,822
合計	7,291,492	合計	7,291,492

財産目録

資産の部 平成15年3月31日現在

科目	摘要	金額
預け金	(財)日本学会事務センター	1,060,160
普通預金	三井住友銀行 / 上野支店	6,231,332
合計		7,291,492



平成 15 年度 収 支 予 算 書 ( 案 )  
( 平成15年4月1日 ~ 平成16年3月31日 )

一般会計

収入の部

勘定科目	平成15年度予算額	平成14年度予算額	平成14年度決算額
正会員会費	2,200,000	2,500,000	2,172,650
賛助会員会費	1,200,000	1,200,000	1,170,000
入会金	20,000	20,000	16,000
広告収入	870,000	900,000	505,250
雑収入	260,000	260,000	656,040
小計	4,550,000	4,880,000	4,519,940
前年度繰越金	3,648,838	3,077,722	3,077,722
合計	8,198,838	7,957,722	7,597,662

支出の部

勘定科目	平成15年度予算額	平成14年度予算額	平成14年度決算額
研究誌発行費	1,680,000	1,700,000	1,274,295
会員通信発行費	150,000	150,000	137,235
大会補助金	600,000	600,000	600,000
秋期シンポジウム補助金	400,000	0	400,000
業務委託費	1,050,000	1,150,000	1,031,892
研究誌発送費	350,000	470,000	241,220
事務通信費	85,000	120,000	83,647
名簿作成積立金	150,000	150,000	150,000
幹事会議費	30,000	50,000	0
編集会議費	20,000	50,000	18,800
雑費	20,000	40,000	11,735
予備費	20,000	30,000	0
小計	4,555,000	4,510,000	3,948,824
次年度繰越金	3,643,838	3,447,722	3,648,838
合計	8,198,838	7,957,722	7,597,662

特別会計

収入の部

勘定科目	平成15年度予算額	平成14年度予算額	平成14年度決算額
寄付金収入	180,000	180,000	234,970
出版収益	50,000	50,000	0
利子収入	200	5,000	191
雑収入	1,500	5,000	1,260
小計	231,700	240,000	236,421
前年度繰越金	7,291,492	7,888,314	7,888,314
合計	7,523,192	8,128,314	8,124,735

支出の部

勘定科目	平成15年度予算額	平成14年度予算額	平成14年度決算額
外国人招待費	200,000	200,000	0
学会奨励賞	300,000	300,000	300,000
細胞バンク委員会	50,000	50,000	0
倫理問題検討委員会	200,000	200,000	400,000
教育システム委員会	100,000	100,000	100,000
Strategic委員会	100,000	100,000	0
情報技術利用委員会	100,000		
雑費	50,000	50,000	33,243
小計	1,100,000	1,000,000	833,243
次年度繰越金	6,423,192	1,000,000	7,291,492
合計	7,523,192	0	8,124,735

( 文責 : 永森静志 )

## 6. 平成15年度奨励賞報告

本年度の奨励賞応募は3課題で、その内2課題が第76回大会奨励賞を獲得した。昨年度までと比べ応募数はかなり少なくなった。おそらく、今年度から応募年齢制限を引き下げたことが理由の一つとも考えられるが、応募時点で35歳未満といえば大学院生を含み研究経験が5—10年ぐらいの研究者であって、奨励賞の対象となる演題を出せる年齢としてはそれ程厳しいものだとは思われない。しかし、実際それが影響して課題応募数が激減したのだとすれば、学会としては小規模でかつ若手研究者の新規入会者数が少ない現実をそのまま反映することになったのかも知れない。しかし、応募数がゼロあるいは該当者無しという事態でなかったのは幸いだった。応募者全員に感謝したい。選に漏れた方は再度挑戦する権利を保持するので、採用されるまでチャレンジし続けるしびとさがあつてよい。その不屈の努力は研究の中味に反映されることは間違いなく、必ず将来に好い効果をもたらすはずである。

直接評価に関わることとして毎回感ずることではあるが、評価の中味や当選者の決定基準が常に絶対的な公正さを持つとは言えない。しかし出来るだけそうなるように審査員数は10名前後とやや多めで、共同発表者は全ての演題の審査に参加できないとするなど評点に一定の公正さが期待されるようにしている。しかしながら、確かに研究の成熟度や解析の深さなどに違いが認められる一方で、奨励賞自体が成長盛りの若手研究者個人向けの賞であるとしながらも所属部門の研究組織総体としての活動と切り離せないところもあるのは否定し得ない。この点は毎年の事であるが、採点表をとりまとめてみると評価委員の先生方もその辺りを承知しつつ採点されていることが伝わってくるのは確かである。従って、評価点の差は必ずしも研究成果の成熟度だけを意味していない。要するに、具体的な研究成果に加えその課題にどれだけ自分が強く関わっているかを表現できているかどうか採点に影響することになる。それが結局のところ、問題意識が明確で創造性豊かな若手研究者を育もうとするこの日本組織培養学会奨励賞の意図するところかもしれない。

平成15年度評価委員：8名（応募者と連名の発表者は含まれていない）

着想、解析、意欲、発表、達成度、独創性の6つの項目に関して各々5段階評価。採択基準：各応募者総持ち点30点とし、8人の審査員の各項目の評点合計の平均値が60%以上；最高点者は最優秀奨励賞とした。発表者の評点の中身は yasumoto@gancen.asahi.yokohama.jp に問い合わせがあれば本人に公表します。

最優秀奨励賞：金山朱里，昭和大学薬学部微生物薬品化学：進展刺激による平滑筋細胞高発現蛋白質 Hic-5 の細胞内局剤変化。

奨励賞：福井康人，広島大学院医歯薬学総合：アクチビン A による顎顔面軟骨誘導

（奨励賞担当幹事：安本 茂，佐藤靖史）

## 7. 日本組織培養学奨励賞を受賞して

昭和大学薬学部微生物薬品化学 金山朱里

この度は、日本組織培養学会第76回大会において日本組織培養学会奨励賞の栄誉を賜り、学会長の許 南浩先生をはじめ大会をお世話してくださった先生方、また選考委員の諸先生方

に心から感謝申し上げます。

今回発表させていただきました演題は当研究室で単離した細胞接着斑蛋白質 Hic-5 の機能解析の一端として行った研究です。Hic-5 は 構造的特徴として4つの LIM ドメインを持つ蛋白質で、繊維芽細胞 2 次元培養系では細胞接着斑に存在し、細胞表面での接着性の制御や、細胞の増殖抑制に関与している因子であることがこれまでに示されています。さらにその分子メカニズムとして、通常は接着斑に存在する Hic-5 蛋白質が、細胞が酸化ストレスや TGF- $\beta$  により核へ移行することや、転写共役因子と相互作用して遺伝子の転写制御に関わることが見い出されています。

本研究では、まず *in vivo* で、Hic-5 は大腸、子宮などの内臓平滑筋細胞、および血管平滑筋細胞に高発現していることを明らかにしました。これらの臓器は共通して高度の伸展、収縮性を有しており、臓器を取り巻く平滑筋細胞は常に細胞形態や接着性の変化にさらされていると考えられます。このことから、次に平滑筋細胞の主機能である伸展、収縮に注目し、細胞伸展システムを用いて実験を行いました。細胞伸展システムは、伸縮性のあるシリコン膜上に細胞を培養し、それを機械的に伸縮させ、生理的な範囲内の伸展率を発生させる装置です。現在、病変状態を再現できる幅広い伸展率を付与できる機械も開発されています（スカラテック）。伸展刺激を与えると細胞骨格の再編成がおこり、培養細胞にも生体組織内の細胞に見られる配向性を持たせることが可能となります。このことから伸展システムは、運動、呼吸、心臓の拍動などに起因する伸展刺激を受けている細胞の研究に有用であると考えられます。

このシステムを用いて、まずフィブロネクチン上の細胞に伸展刺激を与え、Hic-5 の細胞内局在変化を観察しました。その結果、通常は細胞接着斑に局在する Hic-5 が、ストレスファイバー上に移行していました。さらに、Hic-5 の各種変異体を用いた解析から、ストレスファイバー上に局在するために、Hic-5 の 2 および 3 番目の LIM ドメインが必要であり、特に 3 番目の LIM ドメインに結合するフォスファターゼ PTP-PEST が伸展刺激下での局在を決定している可能性を示しました。今後は、細胞接着斑、ストレスファイバー、核といった、刺激に応じて複数の細胞内構造物に局在し得る Hic-5 の局在変化の意義について、組織内の高発現部位の一つである血管中膜平滑筋層に着目して研究を展開させていきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の受賞は私にとって望外な名誉であると同時に、大きな励みとなりました。このような発表の機会をお与えくださいました野瀬 清教授、実験のご指導をいただきました柴沼 質子助教授に深くお礼申し上げます。

#### 広島大学大学院医歯薬総合研究科・先進医療開発科学講座・分子口腔顎顔面外科学

福井康人

このたび、日本組織培養学会第 76 回大会の奨励賞の栄誉をお与え頂き、誠に光栄に存じます。今回発表させていただきました「アクチビン A による顎顔面軟骨誘導」は、私の学位論文に若干のデータを加えさせて頂いたもので、その発表でこのような賞を頂いたことは、大学院 4 年間の努力が報われたような気がいたします。それでは、今回の発表を紹介させていただきます。

現在までに両生類の胚の予定外胚葉に相当するアニマルキャップとアクチビン A を用いるアニマルキャップアッセイより多くの組織が誘導されることが報告されているが、軟骨形成に関しては報告されていませんでした。本実験では、アニマルキャップアッセイを用いて *in vitro*

にて顎顔面軟骨の誘導を試みました。その結果、アニマルキャップを高濃度アクチビン A で処理後、1 時間後に未処理アニマルキャップで挟むアニマルキャップサンドイッチ培養を行ったところ、培養 7 日目でアルシアンブルー陽性の軟骨様細胞が explant 内に誘導されていました。同 explant において、前方外胚葉由来組織に発現する *Xenopus Distal-less4* ならびに頭部腹側に限局して発現する *gooseoid* の発現がみられました。さらに解離再集合系を用いて作成した explant を正常胚腹側に移植したところ、軟骨の他に眼球様構造、神経組織などの誘導がみられ、その配置は正常胚を模倣していました。以上の結果から、in vitro にて下顎に相当する軟骨が誘導されたと考えられました。この培養法は、細胞分化のみならず発生におけるパターン形成をも再現し、脊椎動物の顎顔面領域の発生、再生医療への応用に有用なモデル系であると考えられます。

最後になりましたが、今回このような発表の機会を与えてくださいました大会長の野瀬清先生、御指導を賜りました浅島誠先生、岡本哲治先生、古江美保先生に心から御礼申し上げます。

## 8. 評議員制度の導入について

評議員制度の導入は、ストラテジック委員会で発案されて以来、幹事会で議論を重ね、会員通信でも報告してご意見を伺って参りました。その結果、学会活動を担う中核として評議員制度を導入すること、当面は会長、幹事会、各種委員会よりなる執行部の基本構造は崩さず、評議員会は諮問機関として位置づけること、今後の議論によっては評議員を基盤にする学会運営体制への更なる変更も排除しないことに決しました。それに伴い、以下の様な会則および細則の改正を総会に提案しご承認を頂きました。なお、この会報がお手元に届いたところに、幹事会で選出された評議員候補者へ就任依頼書をお送りします。候補者の皆様は是非お引受けいただきますようお願いいたします。また、評議員に推薦したい方がいらっしゃいましたら、幹事にご連絡下さい。

なお、この会則・細則改正案は、入会手続きおよび各種委員会と幹事会の関係の明確化に関する変更も含んでおります。

[ 会則の改正 ] ( 改正部分のみ、下線が改正部 )

### 第 4 章 執行役員

第 6 条 本会は次の執行役員をおく。

会長 1 名、幹事 8 名、会計監査 2 名

第 14 条 専門委員会委員長（または委員長の指名する委員）は幹事会に出席して議事に参画する。但し、議決権は持たない。

### 4) 評議員

第 15 条 本会に評議員をおく。

第 16 条 評議員は、細則の定めるところにより、正会員の中から幹事会により選出される。

評議員の任期は 4 年とする。重任を妨げない。

第 17 条 評議員は本会の中核として活動を担い、会長、幹事会に対し、必要な提言を行う。

附則

2. 本会則は平成15年5月24日から施行する。

[ 会則の改正 ](改正部分のみ，下線が改正部)

#### 第1章 会員

2. 本会に正会員として入会を希望する者は，(日本組織培養学会機関誌「組織培養研究」に差し込まれている)入会申込み用紙に記入の上，(財)日本学会事務センターへ送付するか，学会ホームページにて提供する手続によって申し込みを行う。

第2条 入会希望者は，上記手続の後，直ちに会員とみなす。

#### 第3章 執行役員の選出

第4条 執行役員の選出は次のとおり行なう。

#### 第5章 評議員の選出

第6条 評議員の選出は次のとおり行う。

1. 会長，幹事は，その任期中，評議員となる。

2. 評議員候補者は，会長あるいは評議員2名の連名によって，幹事会に推薦される。

3. 評議員は，幹事会の議決によって選出される。

#### 第6章 評議員会

第7条 評議員会は，学会活動に関する事項全般を審議する。

第8条 評議員会は，会長が必要と認めた時，または評議員の3分の1以上が要求した時，開催される。

第12条 本細則は，平成15年5月24日より実施される。

(文責：許 南浩)

## 9. 情報技術利用委員会報告

はじめに，第76回大会において当情報技術利用委員会の活動に対し，会長・会員の皆様から温かな励ましのお声を頂いた。期待の重さを強く感じつつ，委員一同より厚く感謝申し上げます。今後，会員の皆様には当ホームページに頻回に訪れて頂けるよう紙面の更新に努めながら，併せて学会活性化のご意見など情報の相互交換のため，e-mail アドレスのご登録，メンバーリストへのご登録についてもお願いして参りたい。

さて，前号会員通信では WEB，ML などのインフラを整えた事を報告した。その後，学会入会手続き，ML 参加手続きのための WEB スクリプトを完成させ，また大会演題オンライン登録システム (UMIN) のカスタマイズを完了した。早速今大会に供してその実効性を試した。

### 1) 第76回大会のオンライン抄録登録に関する報告

UMIN システムによるオンライン登録および電子化データの処理は今回初の経験であったが大きな問題もなく終えることができた。規格統一された抄録を迅速に用意するお手伝いができ，これもインターネットの利点を駆使できた結果と考えている。

## 作業過程

演題オンライン登録受付：2月11日（火）～2月18日（火）（1週間延期）

（受付演題数：シンポジウム 12，一般演題 25，奨励賞対象演題 3）

編集：2月18日（火）～2月26日（水）：プログラム作成，カメラレディー原稿作成

印刷：2月26日（水）レタープレス（広島）へ発送

4月18日 校了

4月25日 学会ユーティリティーセンターへ発送

会員への配送開始：4月28日 学会ユーティリティーセンターから

抄録オンライン公開：5月1日（木） メールアドレスを登録した会員，演者，座長を対象

大会：5月22日（木）・23日（金）

### 2) 学会入会手続きなどのオンライン化

オンデマンドの画面作成にあたっては，スクリプトを書き上げる高度な技術が要求されるが，幸い中川委員がこれに当たってくれた．当ホームページの大きな強みとなっている．

#### オンラインによる入会手続き

2月に開始して以来15件の利用があった．なお，入会のためにこの新規のシステムを利用する件に関して学会会則細則の修正を求め，今総会において承認された．

#### メールアドレス登録およびメーリングリストへのご参加のお願い

e-mail を即時的な相互通信手段として，目下アドレス登録者全員（非会員も含め）へ学会ニュースをお送りし，希望者にはメーリングリストの利用によるグループ間通信を提供している．また会員用，幹事・各種委員会用の各MLも用意している．これまでにアドレス登録72件（会員49件），ML登録45件（会員24件）である．是非ご登録の上，活発なご利用をお願いする．

ホームページ<http://jtca.umin.jp/> 表紙に「メーリングリストのご案内」を掲載している．非会員の方には当学会の活動目的<http://jtca.umin.jp/office/welcome.html> をご理解願った上で，連絡欄へ参加の理由（専門などの自己紹介）をお書き添え頂くことにしている．

ご利用方法は様々と思われるが，論文・TV・新聞記事などにあった話題・意見募集，求人，学会へのご意見，などなど学会活動に関する話題の提供をお願いしたい．また，培養技術質問箱（仮称）の内容もこちらへ掲載の予定です．ご一緒にご議論いただくと幸いです．

### 3) 組織培養技術質問箱システムの構築にあたって

この秋に開設を予定している培養技術質問箱（仮称）について，システム設計に必要な運用方針について幹事会に諮った．回答者の立場を保護する方針の案を提出したが，幹事役員から「質問内容の全公開」「質問者の所属氏名の非公開（ただし回答者には通知）」のご意見をいただき，その方向で目下具体案を練っている．6月中に幹事会にその外枠をお目に掛けてご了解を頂ければ本作成に入る予定でいる．

なお，作業経過については[http://jtca.umin.jp/koza/koza\\_index.htm](http://jtca.umin.jp/koza/koza_index.htm) にてご覧いただけるようにする．

## システム概要

培養技術質問箱（仮称）は以下の2システムを軸として設計する．

1) 細胞バンクによって蓄積された質問および回答集，機関誌などのアーカイブ検索システム：

質問者が検索できるようにすることで重複質問を防ぐ．

2) 専門家への質問システム：

検索等では解決しない比較的高度な、あるいは高度な疑問について、学会の推薦する会員から回答を得ることが出来るようにする。内容はインターネット上に公開し、検索用アーカイブにも蓄積する。

**利用ルール(案):** 2003.05.21(幹事会後に修正)

- 1)このシステムは組織培養技術の普及のために設けられ、他の如何なる目的にも利用できない。
- 2)回答には当学会の推薦する方が当たる。
- 3)質問者は所属、姓名などを明らかにする。
- 4)質問および回答内容は、個人情報としてインターネット上に掲示する。
- 5)質問者は回答者の知的財産を尊重し、場合によっては出版物での謝辞表示、共同研究等の申し入れをするよう勧める。
- 6)著作権は原則として日本組織培養学会が保有するものとする。

#### 4) 公開・非公開情報について

##### 1) 機関誌「組織培養研究」

抄録号(3月号)を初めて限定的なオンライン公開した。これについては、会員は早期(1週間程度)に閲覧できること、電子情報のためコピーが容易なことなどの利点が上げられる。また非会員の演者(第一演者)にも閲覧可能とした。また非会員から閲覧を要望するメールがあったが、現行の方針(以下)によってお断りした。

「抄録の公開は会員および演者の方に限らせて頂いております。これは会員の会費および学会参加費に対する出版サービスでございますので、ご了解下さいますようお願い申し上げます。」

##### 2) 個人情報の保護

当情報技術利用委員会では、オンライン入会システム(日本学会事務センターへ同時送信)、およびe-mailアドレス登録の各個人情報を扱っている。この間、システムの作動管理、入力画面のバグとり、情報分類のため個人情報に触れている(委員長のみ)。今後、個人情報の漏洩防止を徹底する一方で、情報の軽量化も提案していきたいと考えている。

(文責:間中研一)

## 10. 研究教育システム委員会報告

研究教育システム委員会では、先日開催された日本組織培養学会第76回大会において、旭テクノグラスの協力の下にテクニカルセミナーとして「サル ES 細胞の培養法」を企画し、実施した。セミナーは、第1日目はビデオ映像を中心とした、カニクイザル ES 細胞の培養操作の解説を講堂にて行い、約50名の参加者があった。また、2日目には、ポスター会場にて ES 細胞培養法についての質疑応答を行った。ポスターの周りには人が絶えず、盛況であった。当初の企画では、実際の培養操作を間近に見てもらうことを考え、1日目の会場も、ポスター会場で行うことを計画していた。また、参加者は20名程度と見積もっていた。しかし、「ES 細胞」という、今話題の細胞についてのセミナーということで、数名の先生方から会場が狭いのではないかという意見を事前に頂戴し、今回の企画委員会にて検討した結果、急遽、会場を講堂に移すことになった。実際、蓋を開けてみると50名の参加者がおり、1日目の会場を講堂に移して正解であった。このように、当初の計画が急に変更となり、今大会の世話人、野瀬先生、および会場設営に当たられたスタッフの皆さんには大変なご助力を頂いた事をここに記

し、改めて感謝申し上げる次第である。今回のテクニカルセミナーについては簡単なアンケートを実施したので、次回の会員通信にその結果を掲載する予定である。また、アンケート結果を踏まえて、当委員会では今後も会員に対するサービス・啓蒙活動を企画・実施していきたいと考えている。

(文責：鈴木崇彦)

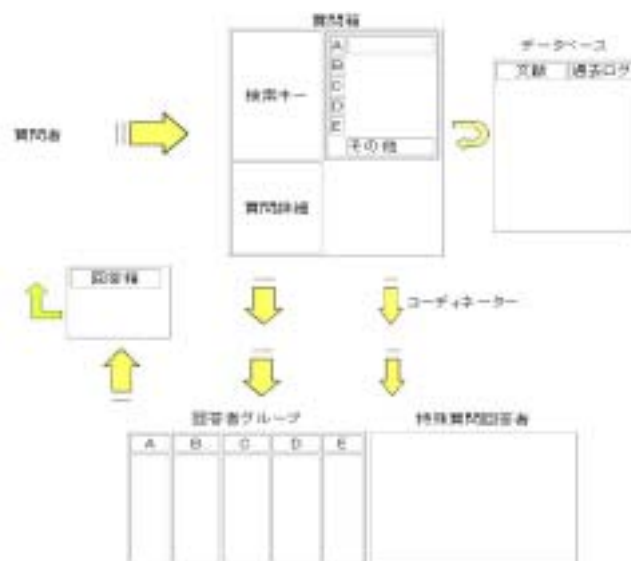
## 11. 「培養技術相談室」の開設について

### 1. 目的

学会は情報交換・相互交流を通じて研究活動を向上させると共に、必要な社会活動を行うのが本来の姿であると思います。情報交換には横の交換と縦の交換があります。縦の交換とは、世代間の情報の伝達であり、社会に支えられて集積した知的資産を次世代に受け継ぐという社会的使命を果たすことです。本学会の創設以来、組織培養は大いに広まり、今や日常的・普遍的な技術となりました。しかし、技術が広まった分だけ、技術を知る人と知らない人の境界領域もかえって広くなり、基本的な問題に悩む研究者あるいはその卵が多数存在します。これはある意味では本学会がより大きく発展しうる豊かな土壌でもあります。私達に課された社会的使命を果たし、同時に本学会を再び発展の軌道に乗せる契機とすることを目指して、「培養技術相談室」をホームページ上に開設致します。(現在は細胞バンクの佐藤(元)、樽松両氏に全面的に依存して、試験運用をしています)

### 2. 運営の概要

右は、「相談室」運営の概念図です。質問内容はまずデータベースの検索につながって、過去に同様の質問と回答があればそれを見ることになります。該当する質問・回答がない場合は、キーワードによる自動割り当てか、コーディネーターによって回答者群に割り当てられます。回答者による回答は Upload され質問者にわたると同時に、データベースに蓄積されます。こうしてデータベースになります。



- 1) 詳細手順は、情報技術活用委員会で検討いただきます。
- 2) コーディネーターは幹事を中心に輪番で担当します。
- 3) 回答者群は評議員会を想定しています。特殊な質問については学会外の人に個人的に依頼することもあり得えます(それを機会に可能であれば評議員になって頂くよう努力します)そのため、評議員には、E-メールアドレス、専門のキーワードを予め登録して頂きます。

(文責：許 南浩)



## 12. 細胞バンク委員会報告

かねてから本委員会でボランティア的に当学会のホームページを管理していましたが、その重要性が高まるにつれ、能動的な情報基盤を作ることが出来る委員会の設置の必要性が高まり、新しく情報利用技術委員会を設置することが承認されてホームページの作成と維持管理が移管されました。新たに委員長となられた間中先生を中心にした委員会の努力により短期間のうちに内容が飛躍的に向上いたしましたので、是非多くの会員に利用して頂きたいと思えます。

細胞バンク委員会は、これまで大野委員長の元で様々な活動を行ないその存在感を示してきたわけですが、大野委員長も長年勤務された理化学研究所を退官されることになり、それに先立ち私、水澤が委員長を拝命することになった次第ですが、力が及ばず、委員会として何から手を付けたら良いか、現在混乱気味のところがあります。そのため、若干低調という印象を与えてしまっているようで、全て私に責任のあるところでお詫びする次第です。

そのようなわけで、今期は各バンクの現状ならびに関連省庁の現状についてご報告をさせていただきます。

本委員会は、国立医薬品食品衛生研究所細胞バンク（水澤）、ヒューマンサイエンス研究資源バンク（竹内）、理化学研究所細胞バンク（大野）、東北大医用細胞資源センター（工藤）、林原生物化学研究所・藤崎細胞センター（松尾）、独立行政法人産業技術総合研究所特許生物寄託センター（増尾）に何名かの利用者の代表という方々で構成されており、国内の細胞バンクの動向を把握できるような体制となっております。

これまでの当委員会の活動もあり、1984年に我が国初めての公的細胞バンクが設立されて以来、研究資源に対する理解と要望は日増しに高まり、各省庁が競って整備してきたという経緯があります。その後、2000年にはヒトゲノムの全配列決定などの出来事にも影響され、ヒトの材料を用いることの必要性が高まるにつれて、その収集体制の整備に関連して、ヒト材料を扱う際の研究倫理の確立という課題が急浮上しガイドラインの作成も行われました（本学会倫理検討委員会も大きな役割を果たしました）。また、国の研究政策の基本方針も、公務員の削減という方針により国立研究機関、国立大学の行政法人化への転換という政策の中で若干変わりつつあります。研究資源については、今後どのように維持管理するかなどが国立大学を中心に重要な案件となってきました。

こうした経緯から、各省庁での研究資源政策の明確化という動きがあり、文部科学省と経済産業省は基本計画を作成しております。厚生労働省は若干遅れており、そのような動きにはなっておりませんが、来春には現在計画中的大阪北部の基盤研（仮称）が竣工する予定となっております。それに合わせて、厚生労働省としての基本方針を作成しなければならないと考えられております。

いち早く整備を開始した文部科学省では培養細胞を含む多数の生命科学に関連する研究資源を包括的に整備する大型予算を組み、様々な動物・植物の維持整備を計る計画を5年計画でスタートしております。理化学研究所細胞バンクと東北大医用細胞資源センターは、この枠組みの中で整備を進めていくものと思われます。

経済産業省においては、平成13年に閣議決定された第二期科学技術基本計画で唄われている”知的基盤整備を体系的・戦略的に推進すべき”という方針に基づいて、これまでの知的基盤整備施策に関する議論の見直し、及び各分野毎の知的基盤整備目標の設定が行われたとのこ

とです。研究用材料などに関連するデータベース等、我が国の知的基盤を、2010年を目途に世界最高の水準のものとするべく早急に整備する「知的基盤の加速的整備」は、重点項目の一つであり、「知的基盤2010プログラムの推進」が掲げられました。「生物遺伝子資源情報」関連では、生物遺伝子資源機関(BRC)における業務の本格化の他、「微生物ゲノム解析」「ヒトゲノム解析」「統合データベース」「リスク管理・評価」に関する取り組み目標がとりまとめられた。

各細胞バンクからの細胞分譲件数は、着実に増加しているようです。昨年度の実績として、厚生労働省細胞バンクは年間で2500アンプルほど分譲し、有償化以後一時低迷していた分譲が持ち直しつつあります。理化学研究所細胞バンクでは、年間3000件を超える分譲件数に増加し、東北大学医用細胞資源センターでは年間1900件を超える分譲件数がありました。なお、東北大学医用細胞資源センターではこれまで印刷物として配布されていた『日本で維持されている可移植腫瘍細胞株一覧表』をインターネット上に公開したとのことですので是非ご利用ください。民間では林原生物化学研究所藤崎細胞センターがコンスタントに細胞入手の依頼に基づいて分譲を続けております。

(文責：水澤 博)

### 13. 名誉会員推載を受けて

高木良三郎

この度、日本組織培養学会の名誉会員として推戴されましたことを、文字通り名誉に思い、また誇りに存じております。私が培養を始めた経緯や、培養学会との関わりにつき述べて頂きます。

昭和29年秋、九大第一内科に入局して間もなく、ウイルスの研究を終わった1先輩から「neurotropic virusの研究と一緒にやらないか」と誘いを受けました。当時、米国ではDr. Endersらがpoliovirusの培養、ワクチン作成に成功したばかりでした。お話を聞いて“生体の細胞がガラス器内で培養できる”ということに非常なインパクトを覚えた私は、2つ返事で培養を手伝うことにしました。とは申せ、その先輩も培養の経験があった訳ではなく、所属する研究室もないゼロからの出発で、結核病棟地下の使用されていない滅菌室を借り、廃物を利用した手造りの無菌箱や実験台を使用し、口の割れた試験管の補修、plasma clot培養のための鶏の飼育、牛血清を調達するための屠殺場通いから始まりました。翌年から、培養を用いた“ポリオの疫学的研究”をテーマとして、地階のワイル研究室の片隅で実験することになりましたが、材料の準備、器具の洗浄、滅菌などに半日は費やし、白衣は洗浄用クロム硫酸で穴だらけの始末でした。肉体的には可成りの負担でしたが、若さが夢を追った張りのある毎日でもありました。

昭和32年、ポリオの研究は何とか纏まり、先輩も市中病院に就職された夏、着任間もない山岡教授が、翌年の内科学会に“腺熱リケッチャ”の組織培養を発表されることになりました。リケッチャの組織親和性をみるため、ラット、マウスなどの組織の培養を担当して明け暮れているうちに、ラットの心臓から増殖し続ける細胞が分離されました。教授から、これを機に、同様に増殖を続ける癌を研究してはどうかと勧められましたが、このラット由来細胞を、HeLa

や L などの株細胞と同一に考えて良いか、癌研究の上で、この細胞とどの様に“付き合って”行くべきか、など多くの疑問を抱え、また試行錯誤の自己流培養法についても、悩み多い日々を送っておりました。この時、たまたま大学前の書店で勝田甫著『組織培養法』に遭遇しました。当時としては珍しいアート紙で、写真入りの誠にすっきりした、しかも痒い処に手の届く培養技術の解説書であり、早速、店主に頼んで月賦で購入し、干天に慈雨の思いで読み通しました。読むほどに、この本の著者に直接会って疑問を解決したいという止むに止まれぬ気持ちになり手紙を出した処、秋の癌学会にその機会が与えられました。当日、質問事項を数箇条に纏めて学会の合間にお会いしましたが、先生は親身にポイントを指摘され、勇気付けられると共に、胸のつかえがすっかり取れた気分になりました。勧められて翌年の組織培養研究会に株細胞のデータを発表しましたが、その研究会の学究的熱気にはすっかり圧倒され、培養学会の活気と厳しさを思い知らされた次第です。この発表を契機に先生から連絡を頂くようになり、昭和35年1月から伝研(医科研)の研究室に株細胞持参で3カ月お邪魔することになりました。滞在中、この株の培養条件を詳しく検討して、英語論文として纏めて頂きましたが、先生の研究室には多くの研究者の出入りがあり、これらの方々と交流出来たのも大変幸せでした。勝田先生は研究に関しては決して妥協を許さない、芸術家肌の方でしたが、一方、温情的で細かいことに気配りをされ、また、若手研究者の育成に尽くされた方でもありました。私の未熟さの故に、先生の片腕であった高岡先生には、随分と気配りして頂いたことを感謝しております。九大に復帰後、教室では組織培養研究室が独立して認められ、ワイル研究室の片隅に同居しながら、本館地階の1室にベニヤ板で仕切った1坪位の培養室が与えられました。

昭和36年、「組織培養による癌研究」勝田班のスタートと共に班員に加えられましたが、年5回の班会議、毎月の月報という厳しさは、空前絶後の班であったといえるでしょう。班がスタートして間もない8月、その年は日本脳炎や赤痢の患者が多く、隔離病棟の主任であった私は診療に追われていました。月報締め切りの前日、「今月は月報が送れません」と先生に電話した処、『月に紙ツ切れ一枚書けないような奴は研究者の風上にも置けない』と一喝されました。一瞬、班員もこれまでかと覚悟しましたが、ややあって「関係論文の1つや2つは読んでいるんだろう。コメントでも書いて至急よこせ」と救いの言葉が続きました。以後17年間、ともかく月報を欠かしたことはありません。

昭和37年秋、許しを得て「株細胞と癌細胞の *in vitro* 同定」を目的にテネシー州メンフィスの St. Jude's Research Hospital に留学しました。新設の素晴らしい設備を有する研究所の最初のフェローとなった訳です。ところが、研究所に着いて3日目にボスの Dr. Goldstein から言い渡されたテーマは、臍島の培養でした。留学の目的を具申はしてみたものの、「癌を知るためには、まず“正常”の何たるかを知るべきである」と申し渡されました。私にとっては予想もしなかった未知の分野であり、最初の10ヵ月は全く成果が上がらない、可成りのストレスの日々でしたが、クリーンルームで、自由に材料を使って実験が許されたことは幸いでした。がむしゃらに培養してきた経験も生かされて、2年目に家兎臍の器官培養と共に、4系列の株細胞を樹立しましたが、臍を酵素処理して植え込んだカレルプラスコに、いくつかのコロニーが見出された時の喜びは忘れられません。視察に訪れた Dr. Eagle の紹介で Wistar Institute Monograph に掲載され、Baltimore での ATCA に発表して2年後に帰学し、勝田班にも復帰しました。以後は臍島細胞の培養も手掛け、九大研究室7~8名のグループを培養内発癌と臍島細胞培養に分けました。昭和41年、第21回の研究会をお世話しましたが、この頃から学

内外の若い研究者が研究室を訪れるようになりました。昭和44年、MNNGによる培養内発癌に成功し、班員としての面目を何とか保つことが出来ましたが、以後、私自身の研究の主体は次第に豚島細胞を中心にした functional cultures に移行し、昭和51年、福岡の第41回研究会では、これをシンポジウムのテーマと致しました。

人間、何が幸いするか分かりません。昭和53年、新設の大分医大の内科学講座に移ってからは内分泌・代謝(糖尿病)を担当することになり、米国で、ボスの意向により不本意ながら手掛けた豚島細胞の培養は、技術的に改良して豚島細胞機能の解析に役立ち、さらに豚島(細胞)移植へと展開することになったのです。私の“基礎体力”は、組織培養学会員として、また勝田班のメンバーとして、培養と悪戦苦闘したことにより培われました。その意味で本学会は、私の研究面におけるルーツといえるでしょう。

ところで、昨今は細胞のレベルを超えて分子、遺伝子の時代となり、マニュアル、効率の良さ、スピード、そして結果が尊ばれる時代となりました。細胞をはじめ、培養材料は殆ど購入可能となり、“レトルト食品”と相通ずる感があります。自ら分離した細胞には愛着が湧くものですが、細胞が容易に入手できる便利さは、それを生命のない“物”として取り扱う傾向を生みはしないでしょうか。細胞も当然、環境に応じて表現型は変化します。分子生物学的あるいは遺伝学的研究を行うに当たっても、生命体の最小単位であり、原型ともいべき細胞の本質は十分に理解して取りかかるべきで、組織培養学会は、細胞の「息づかい」を感じながら実験する研究者の集団であって頂きたいと思うのです。そして、例え学会のスケールは小さくとも、アカデミックな理念は高く掲げ、しかも“地の塩”としての役割を果たして頂きたいのです。

私は、今後とも出来る限り学会に出席して皆様の発表を伺い、リフレッシュされたいと考えております。

重ねて、名誉会員推戴を感謝致しますと共に、学会の21世紀へ向けてのさらなる充実、発展を祈念致します。

## 14. 編集委員会・編集事務局報告

平成15年度第1回編集委員会は、平成15年5月22日、昭和大学において開催致しました。

1. 昨年末米国 Society for In Vitro Biology の学会機関誌 (In Vitro Cellular & Developmental Biology; In Vitro) の編集長である Dr. Wallace Mckeehan より、組織培養研究 (TCRC) と合併も視野にいたった joint journal 発行の可能性についての問い合わせがありました。この件については学会にとっても重要な案件ですので、編集委員会、幹事会と連携しながら、対応してゆく予定です。
2. 今後 In Vitro との相互協力関係の一貫として、手始めに例えば総説やシンポジウム記事などを相互に掲載する企画を進めることにしました。
3. 学会誌の活性化企画として、本年度中に会員の興味が高いテーマについて特集号を企画することが了承されました。会員の皆様からもテーマの提案を歓迎致しますのでご連絡お願い致します。
4. 編集委員会及び組織培養研究発行費の平成14年度収支決算が了承されました。

(文責：星 宏良)